

『五朝小説』と『伽婢子』(四)

渡 辺 守 邦

本稿は『五朝小説』のうちから『伽婢子』に撰取利用された話を取り出して影印を掲げ、書き下し文を添えてみた

ものであり、本誌六〇号(平一八・三)から始まった連載の四回目に当り、最後の十二話を採りあげる。書き下し文はこの種の文体に疎い素人の試案であり、補訂を期待するタタキ台であつて大方の批判提言を庶幾するところである。

またもう一つ、本稿はひそかな目的を持つ。新古典文学大系『伽婢子』に脚注として『五朝小説』からの引用を載せたが、その引用に与えた読みを検証してみようとする目論見がそれ、読みに補訂を加えてみた。なお、同大系の『伽婢子』は花田富二夫氏との共著であり、『五朝小説』の読解に関して、過半は花田氏の功に帰するところであることをここにお断りしておく必要がある。

『五朝小説』の底本は国立公文書館内閣文庫所蔵で、その漢籍目録に次のように載るものを用いた。

五朝小説(存唐人百家小説) 三七一／八

五朝小説(存宋人百家小説) 三七一／六

ともに林羅山旧蔵の明板である。

また原話の所在を、

★龍城録「趙師雄醉憩梅花下」(存唐人百家小説・第一冊② 四オウ四ウ)

のごとく表記した。これは《龍城録》が、「存魏晉小説」「存唐人百家小説」「存宋人百家小説」「存明人百家小説」の五朝四集によって構成される『五朝小説』のうち、《存

唐人百家小説》全二十四冊中の《第一冊》に配属され、第一冊所収の小説二点のうちの《②》番目に位置すること、そして、『龍城録』の《四オウ四ウ》、すなわち第四丁オモテ面から同丁ウラ面に当該の一話が見出しを《趙師雄醉憩梅花下》として存在する、等々のことを意味する。ちなみに『五朝小説』にあつて丁付は所収の小説ごとに改丁される。凶版のキャプションではこれを、

龍城録「趙師雄醉憩梅花下」(唐・一④ 四オウ四ウ)のごとくに略記した。

類話・参考文献の底本は次のごとくである。

事文類聚(古今事文類聚)

寛文六年八尾勘兵衛板

(時珍) 本草綱目

承応ごろ無刊記板

太平広記

『太平広記』(一九六三 平平出版社)

説郛

『説郛三種』(一九八八 上海古籍出版社)

なお今回採りあげたうちに、稿者の力をもつてしてはまったく歯の立たない例があつた。〔36〕『睽車志』の「龍舒人劉観云々」である。困つたあげくに影山輝國氏のお力にすぎることにした。影山氏によれば、『五朝小説』の引く『睽車志』に誤字があるとのこと、氏の示教に即して不明箇所の意味を汲んでみると、次のようになるらしい。

舟人は娘の監視のため嚴重なカンノキの出入口を設

けて、科擧の試験会場ながら防備に専念した。科擧の当日は警戒心を解いて交易の市に出かけたが、その日の試験は主人公唐卿にとって予習済みの問題だったので試験場を早々に退出することができ、二回目の試験もまたしかり。やすやす娘さんと懇ろになることができた。

影山氏のお教えは逐語的に語義を説いてくださるものであつて、こんなアバウトな説明ではなかつた。これは、いま、私に大概を示してみたまでである。詳しくは当該箇所をご覧ください。

今回採りあげた十二話は次のごとくである。

34 伽婢子 一一一「早梅花妖精」

龍城録「趙師雄醉憩梅花下」(存唐人百家小説・第一冊④ 四オウ四ウ)

35 伽婢子 一一一「厚狭応報」

睽車志「紹興初福建寇乱賊云々」(存宋人百家小説・第一七冊③ 三ウ四オ)

36 伽婢子 一一一「邪淫の罪立身せず」

睽車志「龍舒人劉観云々」(存宋人百家小説・第一七冊③ 一オ二オ)

37 伽婢子 一一一「盲女を憐て報を得」

茅亭客話「庚子歲天兵討益部賊云々」(存宋人

百家小説・第二冊③ 二ウ〜三ウ)

38 伽婢子 一一一六「大石相戦」

集異志「後趙石季龍時云々」(存唐人百家小説・第六冊② 七ウ)

説・第六冊② 七ウ)

39 伽婢子 一一一「天狗塔中に棲」

諾臯記「博士丘濡説云々」(存唐人百家小説・第五冊③ 十三オ〜十四ウ)

第五冊③ 十三オ〜十四ウ)

40 伽婢子 一一二「幽鬼嬰兒に乳す」

鉄冨山叢談「河中有姚氏云々」(存宋人百家小説・第五冊④ 五オ〜六オ)

説・第五冊④ 五オ〜六オ)

41 伽婢子 一一三「蛇瘤の中より出」

異疾志「刁俊朝妻」(存唐人百家小説・第一五冊⑥ 四ウ〜五ウ)

冊⑥ 四ウ〜五ウ)

42 伽婢子 一一四「伝戸禳去」

異疾志「徐明府」(存唐人百家小説・第一五冊⑥ 三ウ〜四オ)

⑥ 三ウ〜四オ)

43 伽婢子 一一五「随転力量」

墨崑崙伝「李摩雲」(存唐人百家小説・第一九冊③ 二オ〜二ウ)

冊③ 二オ〜二ウ)

44 伽婢子 一一六「虱瘤」

異疾志「虱瘤」(存唐人百家小説・第一五冊⑥ 五ウ〜六オ)

五ウ〜六オ)

45 伽婢子 一一九「怪を話ば怪至」

龍城録「夜坐談鬼而怪至」(存唐人百家小説・第一冊④ 七ウ〜八オ)

第一冊④ 七ウ〜八オ)

なお過去三回掲載の分を含め、『五朝小説』と『伽婢子』との関係を一括してまとめ、付録として巻末に載せた。終りに、図版掲載をお許しくださった国立公文書館内閣文庫にお礼を申し上げます。また『五朝小説』の難読箇所について示教を賜った影山輝國氏にもお礼を申し上げます。

〔34〕 伽婢子 一一一 早梅花妖精

本話は全体的枠組を五朝小説の龍城録「趙師雄醉憩梅花花下」に拠るが、これに事文後集十一・女の項の「崔護渴水」の説話等を織り混ぜ、夫木抄等の和歌を巧みに利用して浪漫的物語に仕立てた。なお、龍城録の同話は、事文後集二十八・梅花の項に「飲梅花下」として記載され、新語園十の十九にも見える。

★龍城録「趙師雄醉憩梅花下」(存唐人百家小説・第一冊

④ 四才(四ウ)

隋ノ開皇中、趙師雄、羅浮ニ遷ル。一日天寒シ。日暮レテ酔醒ノ間ニ在リ。因テ僕ト車トヲ松林ノ間ノ酒肆ノ傍舍ニ憩ハセ、一ノ女人淡粧素服シテ師雄ヲ出迎(む)フルヲ見ル。時已ニ昏黒、残雪月色ニ対シテ微明ナリ。師雄之ヲ喜ビ之ト与ニ語ルニ、但(た)芳香人ヲ襲フヲ覚ユ。語言極メテ清麗ナリ。因テ之ト与ニ酒家ノ門ヲ扣キ、数杯相ヒ与ニ飲ムヲ得タリ。少頃(らく)シテ一ノ緑衣ノ童ノ来ル有テ、笑ヒ歌ヒ戯レ舞フ。亦觀ル可キ頃自り酔テ寝(い)ル。

師雄亦懵然トシテ但(た)風寒ク相ヒ襲フヲ覚ユ。久之(ば)時アリテ、東方已ニ白ム。師雄起キテ視ルニ、乃(ま)シ大ナル梅花ノ樹下ニ在リ。上ニ翠(か)ノ羽ノ啾嘈タル有

リ。相須(事文類聚に「相顧」、月落子參(參宿)横(よこ)リテ但(た)惆(たい)ミ悵(な)クノミ。

★事文類聚・後集二八「飲梅花下」

隋ノ開皇中。趙師雄遷(ル)ニ羅浮。一日天寒。日暮於(テ)松林間酒肆ノ傍舍。見(ル)ニ美人淡粧素服出迎(テ)ル。時已昏黒残雪未(レ)消。月色微明(ナリ)。師雄与(ニ)語。言極清麗。芳香襲(レ)人。因与(レ)之扣(テ)酒家門共飲。少頃有一(ア)緑衣童子笑歌戲舞。師雄醉寐。但覺風寒相襲(コト)フ。久之東方已(ニ)白。起視、大梅花樹上有(ニ)翠羽刺嘈、相顧(レ)ハ。月落參横、但惆悵(スル)而已龍城録。

★事文類聚・後集一一「崔護渴水」

崔護拳(ラ)ニ進士(ニ)不(レ)第。清明(ニ)独遊(テ)ニ都城南(ノ)得(ニ)村居(ヲ)花木叢萃。叩(ク)門。久之有(ニ)女子(一)自(ニ)門隙(一)問(フ)之。対(テ)曰。尋(テ)春(リ)独行酒渴(シ)テ求(レ)飲。女子啓(レ)閤以(ニ)盂水(一)至。独倚(ニ)小桃柯(一)佇立(シ)テ而属(ス)意殊厚。崔辞。起送(テ)至(レ)門如(レ)不(レ)勝(レ)情而入。後絶(シ)テ不(レ)復至(マ)。

及(テ)二来歲清明(ニ)徑(チ)往(テ)尋(レ)之。門庭如(ニ)故(一)而戸(ト)扃(セ)矣。因(テ)題(シ)テ詩于其左扉(ニ)云。去年今日此門中。人面桃花相映(シ)テ紅。人面不(レ)知何(レ)処(ニ)去。桃花依(レ)旧笑(ニ)春風(一)。後数日(ア)復往。聞(ル)ニ其中哭声(一)問(フ)之。老父(ノ)云。君非(ニ)崔護(一)耶。吾女自(ニ)去年(一)恍惚(ト)シテ如(レ)有(レ)所(ル)失(ス)。及(テ)見(ニ)左扉(一)字。遂病而死。請(テ)入(レ)哭(フ)。

之。尚儼然^{トシテ} 在^レ床^ニ。崔拳^ケニ女首^ヲ一枕^ニ其股^ニ。曰。護在^レ斯。護在^レ斯。須臾開^レ日半^ヲ。復活^ス。老父大喜^ニ以^テ女婦^レ之^ニ。本事詩話。

【参考】說郭 卷二六（二四六）

〔35〕 伽婢子 一一一三「厚狹応報」

宋代の福建で李稷に投降した数多の乱賊のうち葉百小一人が讒言を信じた稷臣により処刑され、死後に復讐を果すという五朝小説の睽車志「紹興初福建寇乱賊云々」の一話を防長二州の太守大内家滅亡の時代に移し、心ならずも陶晴賢に臣従した厚狹の某という武士の身の上に転ずる。李稷は苛暴をもって知られた官人で本文中の稷臣はその家臣の意であろうか。原話の葉百小は火刑の苦しみを熱病によって報復するが、厚狹の亡霊は鹿毛の馬に騎って晴賢を追い詰める。

★睽車志「紹興初福建寇乱賊云々」（存宋人百家小説・第

一七冊③ 三ウ〜四オ）

紹興ノ初メ、福建ノ寇乱ノ賊魁ヲ張義、張万全、葉百小ト曰ヒ、凶焰（凶悪な勢力）頗（おほ）ニ盛（あふ）ルレドモ、提形（刑）ノ李稷ガ臣、論（と）シテ之ヲ降ス。二張、稷臣ニ之（た）リ且（つ）ンデ言ク、葉ニ降ル意無シ。將

ニ復タ変ヲ為サント。稷臣之ヲ信ジテ、乃シ大ナル柱ヲ通衢（大通り）ニ植（た）テ、葉ヲ取（とり）ヘテ鉄索ノ鎖ヲ以テ柱ニ縛シ、炭ヲ熾シテ囹圄シ、醢（ほ）ニ五辛ヲ和（ま）ゼテ之ヲ飲マセ、極（き）シキ楚毒（苦しみ）ニ備（あ）ハセ、稷臣躬（みづ）臨ミテ之ヲ視ル。葉、大ニ呼ビテ曰ク、我已ニ降ニ就（した）フ。何ノ罪アリテカ此ヲ至（た）スト。体皆焦（や）ケ爛レテ乃シ死ス。是レ自リ稷臣毎ニ独坐スル時、葉ノ側（かた）ニ在ルヲ見テ大ニ惡（にく）ム。三年ノ後、稷臣偏ク体ニ瘡疱ノ状（あり）生ジテ、大ニ灼（や）クガ如シ。痛ミ忍ブ可カラズシテ、竟ニ卒ス。

宋ノ左藏院常ニ言ク、家故（自家の出来事）ナレドモ、沢州ニ第宅園囿有リテ、牆ノ角ニ古塚有リ。池ヲ治（お）スニ因テ之ヲ発（あ）キ、一ノ名誌ヲ得タリ。題シテ郡守李公之墓ト曰ヒ、石ヲ疊ミテ藏ヲ為（つ）リ、朽骨一具ヲ中（さ）メテ他ノ物無シ。而シテ棺之側ニ石ヲ鑿チテ郭（刑）ノ「乳」カ）婢抱哺嬰兒ヲ為ル。其レ何ノ為ス所ナルカラ知ラザル也ト。

【参考】說郭 卷一一八（五四六）

〔36〕 伽婢子 一一一四「邪淫の罪立身せず」

五朝小説の睽車志「龍舒人劉觀云々」の構想に基づき、

最終段落で不覚の事件を加えて原話を改変し、教訓的な
言辭を挿入して、仕官がかなわぬ者達への勸戒談とした。

★睽車志「龍舒人劉觀云々」(存宋人百家小説・第一七冊)

③ 一オ(二オ)

龍舒ノ人劉觀ハ仕ヘテ平江ノ許浦ニ監酒タリ。其ノ子ノ
堯拳ハ字唐卿、嘉禾ニ就(むおも)キ流寓スルニ因リテ、試
(科拳)ニ赴クニ舟ヲ僦(とや)ヒ以テ行ク。舟人ニ女(むす)
有リ。堯拳之(れ)ヲ調(づてな)ケントス。舟人防ギ閑(ぎさえ)ル
コト甚ダ嚴ナレバ、間(き)ヲ得ルニ由(てだ)無シ。既(がや)テ
引キ試ルニ、舟人以其重為棘闈(一いばらの囲い)無它慮
也(睽車志の一本に「舟人以其重肩棘闈無它慮也」一舟人
其ノ重肩(一嚴重なかん)のき)ヲ棘闈ニ以(ち)ヒテ它(かほ)
ノ慮(ばおもん)リ無キ也)。

日(ひある)市ニ出テ貿易ス。而シテ試題通唐卿私課既得出
院意甚歡此両場皆然(睽車志の一本に「試題適唐卿私課既
得意出院甚早比両場皆然」一試題、唐卿ノ私ノ課(こみ)ニ
適ヒ、既(がや)テ意ヲ得テ院ヲ出ルコト甚ダ早シ。両場(一
二回の試験)ヲ比(あは)セテ皆然リ)。遂ニ舟女ト諧(やしな)ギ
ヲ得テ私約ス。

觀夫婦一タノ夢ニ、黄衣一人馳セ至(き)タリ、牖(一牖

か)ヲ報ジテ云ク、郎君ハ首薦ナリト。觀、前(す)ミテ其
ノ牖ヲ視ント欲スルニ、適(ま)ニ一人忽チ掣(さま)ゲ去
(ぞり)ケテ云ク、劉堯拳近ゴロ欺心ヲ作ス事、天符ハ殿一
拳(一当該試験最下位)トセリト。言(ば)ニ其ノ夢覚メ、
協(お)エテ頗(おほ)ニ驚キ異(あや)ム。

俄(なほ)クシテ卷(一答案用紙)ヲ拆ク。堯拳、雜犯ヲ
以テ主文ヲ黜ラレ、皆其文ヲ歎キ惜ム。既(て)帰レバ、
觀、夢ヲ以テ之ニ語り、且ツ其ノ近作何事アルカヲ告(と)
ヘバ、匿シテ敢テ言ハズ。次ノ拳ニ首薦ヲ舒ニ果シ、然シ
テ今ニ至ルマデ未ダ第(一合格)セザル也。

【参考】説郛 卷一八(五四九六)

〔37〕 伽婢子 一一一五「盲女を憐て報を得」

原話は五朝小説の茅亭客話「庚子歲天兵討益部賊
云々」の、盲目の孤兒を育んだ貧婦の一話。その善行を
称賛する教訓的な一文を含めて、原話にはそのまま即
す。

★茅亭客話「庚子歲天兵討益部賊云々」(存宋人百家小
説・第二冊③ 二ウ(三ウ))

庚子ノ歲、天兵、益部ノ賊ヲ討ツニ、圍ミヲ突ケバ宵遁

(II夜逃げ)ス。主帥(II指令官)城中ノ民ヲ慙ミテ便チ招誘シテ城ヲ出ダシ、大軍方ニ入テ搜捕シテ、平定ニ及ビテ後、尽ク家ニ歸ラ令ム。

南市ノ渠(ぞみ)ノ中ニ一ノ盲女七八歳ナル有リ、叫ビテ云ク、父ヤ母ヤ兄ヤ嫂ヤ、何処ニ去(ゆ)キテ、我ニ飲食ヲ供給セザルカト。其ノ盲女饑渴ノ逼ル所ト為レドモ、家無キヲモ知ラズ、但(だ)父母兄嫂ヲ怨ミテ旦夕輟(や)マズ。隣婦有リテ云ク、此ハ孫氏ノ女、三歳ニシテ瘡痘ヲ患ヒテ眼ニ入ルニ因リテ、父母其ノ聡慧ヲ憐ミ、常ニ念仏書ヲ教ヘテ鞠(だ)テ養フコト甚ダ厚カリキ。父ハ輸給ノ迫(お)バザルニ於(り)テ死ニ、母ハ憂憤ニ於テ死ニ、嫂ハ役夫ヲ供給スルニ因テ流レ矢ニ中リテ斃レ、兄ハ城陷チテ存亡ヲ知ラズ、更ニ親戚無シト。觀ル者心ヲ痛メ涕ヲ洒ク。旬ヲ経テ或(ある)隣婦ニ遇ヒテ云ク、盲女ハ它人ノ飲食ヲ接(う)ケズ、但(だ)悲(げ)キ号叫シテ其ノ親ヲ呼ビ、水飲モ口ニ入レズ、蘇リテハ復タ絶シ、七日ニシテ卒スト。因テ憫ミテ余燼ノ材ヲ拾ヒ、聚メテ之ヲ焚クニ、盲女ノ衣中ニ白金一両ヲ獲タリ。遂(つ)テ之ヲ鬻ギ以テ僧ニ画像ヲ供シタリ。嗚呼、城ノ陷ル日、此ニ似タル者多シ。独リ盲女ヲ書(る)スハ、言鄙ナリト雖モ意(ば)ニ激(げ)シキ有レバナリ。夫レ家富ミ財饒(か)ナル則(と)ンバ礼ト儀ト興リ、財苟(し)足ラザル則ンバ礼ト儀ト俱ニ廢(た)ルハ、蓋シ人ノ常ノ情也。

是ノ時ニ当リテ也(た)民家ノ財物ハ罄(こと)ク空(こ)キテ、窘迫尤モ甚シ。豈(ん)ゾ謂ハン、隣婦独リ能ク余燼ノ材ヲ拾ヒテ盲女ヲ焚焼シ、復タ女ノ衣中ニ金ヲ獲テ己ガ用ト為サズ、盲女ノ与(め)ニ僧ニ画像ヲ供ス、奇ナル哉ト。隣婦能ク困窮窘逼ノ際ニ於テ、誠ヲ存(も)ツコト是クノ如シ。故ニ特ニ之ヲ書(る)ス。且ツ今之(れ)利ヲ見テ義ヲ忘ルル者ハ、斯ノ隣婦ノ為ニハ之(れ)罪人ナラズヤ。

【参考】説郭 卷三七(二七〇五)

〔38〕 伽婢子 一二一六「大石相戦」

原話は五朝小説の集異志「後趙石季龍時云々」と見なされるが、石より血が流れる部分のみが一致し、二石が戦うことや災いの前兆という主要なテーマに結びつく点は見えない。両石の戦いという怪異現象を、謙信の死の予兆とともに謙信の跡目をめぐる景勝・景虎両将の争いに転じた。この一話は北越軍談四十一「春日山ノ城下怪異付大石闘戦の兆を示す事」に採られている。

★集異志「後趙石季龍時云々」(存唐人百家小説・第六冊 ② 七ウ)

後趙ノ石季龍ノ時、東海ニ大石有リテ自立ス。傍ラニ血

流有り。鄴ノ西山ノ石間ニモ血流出スコト長サ十余歩、広サ二尺余ナリ。大武殿ノ画ノ古賢、悉ク変ジテ胡(あび)ト為リ、旬余ニシテ頭悉ク肩中ニ縮ミ入ル。季龍大イニ之ヲ悪ム。

【参考】説郛 卷一一六(五三四三六)

〔39〕 伽婢子 一三一「天狗塔中に棲」

五朝小説の諸臯記「博士丘濡説云々」に載る妖怪にさらわれた女性の見聞談を足利義政の時代に移し、勧進能の失火の混乱に紛れて天狗に拐かされた町家の男児の身の上を翻する。寛正五年のこの勧進能は後世まで伝聞した盛事であつたが、興行中の火事は史実に反する。これは棧敷崩れの大田楽(太平記二十一・田楽事付長講見物事)一件を取込んだもの。また、火災一件のことは、太平記二十一「法勝寺塔炎上事」等を契機とするか。

★諸臯記「博士丘濡説云々」(存唐人百家小説・第五冊③)
十三オ(十四ウ)

博士丘濡説(はい)ク、汝州ノ傍県ニ五十年前、村人其ノ女ヲ失フ。数歳アツテ忽(かは)ニ自ラ帰リテ言ク、初メ物ヲ被リテ寐リシ中ニ索去(わか)サレ、倏(かは)ニ一処ニ止ル。

明ルニ及ビ乃シ古塔ノ中ニ在テ、美丈夫ヲ見ル。謂テ曰ク、我ハ天人(異界の住人)ナリ。分合、汝ト得(あ)ヒテ妻ト為ス。自ラ年限有り。疑ヒヲ生ジテ懼ルルコト勿レト。且ツ其レ外ヲ窺ハザレト戒メ、日ニ兩(ふた)下(地面)ニ返リテ食ヲ取(も)ム。有ル時ハ炙リシ餌猶ホ熱シ。

年ヲ経テ、女、其ノ去(い)クヲ伺ヒテ竊カニ之ヲ窺ヒ、空ニ騰(か)ルコト飛火ノ如ク、髪ハ藍、膚ハ磔磔、耳ハ驢ノ如クニシテ、地ニ至リテ乃シ人ニ復スルヲ見(まのあ)シテ、驚キ怖レテ汗洽(あま)シ。其ノ物(もの)返(かへ)テ覺(と)リテ曰ク、爾固(か)ト我ヲ窺フ。我実ハ野叉ナリ。汝与(と)縁有レバ、終ニ汝ヲ害サズト。女素患(すな)ニ謝シテ曰ク、我既ニ君ガ妻ト為ル。豈ニ悪(にく)ミ有ランヤ。君靈異ト既(まだ)ル、何ゾ人間ニ居(す)ヒ、我ヲ使(し)テ時ニ父母ニ見エサセザルト。其ノ物言ク、我が輩(がら)ノ罪業、或ハ人与(と)雜(ま)リ処ル則ンバ疫癘ヲ作(な)ス。今形跡已ニ露(あら)レタレバ、爾ガ縦觀ニ任セン。久シカラズシテ当ニ爾ヲ帰スベシト。

其ノ塔、人居ヲ去(さ)ルコト止(せ)リテ甚ダ近シ。女、常ニ下視ス。其ノ物、空中ニ在リテ形ヲ化(か)ルコト能ハズ、地ニ至リテ方ニ人与(と)雜ル。或ヒハ白衣塵中ノ者有ラバ、其ノ物、斂手シテ側ニ避ク。或ヒハ其頭ヲ挽(う)タレ其ノ面ニ唾(つばは)ケラルル者ヲ見ル。行ク人悉ク見(と)

メザルガ若シ。帰ルニ及ビ、女、之ニ問フ、向(さ)ニ君ヲ街中ニ見ルニ、敬フノ者有リ、戯レ狎ルルノ者ノ有ルハ何ゾヤト。物、笑ヒテ曰ク、世ニ牛肉ヲ喫(く)フ者有リ、予(わ)得(あ)ヒテ之ヲ欺ク。或ヒハ忠直孝養、釈道ニ戒律法籙ヲ守ル者ニ遇(あ)ヒテ、吾、悞チテ之ヲ犯サバ、当ニ天戮(天罰)ニ為(あ)ルベシト。

又年ヲ経テ忽(には)ニ悲泣シテ女ニ語ルラク、縁已ニ尽キタリ。風雨ヲ候チテ爾ヲ送り帰サント。田(田)廣記に「因」一ノ青石大キサ雞卵ノ如キヲ授ケテ言ク、家ニ至リ此ヲ磨リ之ヲ服ス可シ。能ク毒氣ヲ下サント。後一夕風雷ス。其ノ物遽ニ女ヲ持(も)リテ曰ク、去(ゆ)ク可シト。釈氏ノ如ク言ヒテ、臂ト頂トヲ屈伸ス。已ニ其ノ家ニ至リ、之ヲ庭中ニ墜ス。其ノ母因テ石ヲ磨リテ之ヲ飲マスレバ、物ノ青泥ノ如キヲ下スコト斗余ナリト。

【参考】太平広記 卷三五七 (二八二六頁) 説郛 卷一

六(五三六頁)

〔40〕 伽婢子 一三一―二「幽鬼嬰兒に乳す」

五朝小説の鉄圀山叢談「河中有姚氏云々」に基づき、終末の一部を削除するのみで、ほぼ忠実に従う。類話に、片仮名本因果物語・中ノ二十三等の亡母が我が子に授乳

するといふ幽霊女房談の一種。

★鉄圀山叢談「河中有姚氏云々」(存宋人百家小説・第五冊④ 五オ―六オ)

河中ニ姚氏有リ。十三世折(だ)エズシテ居ス。累代、旌表ニ遭(め)リ逢フテ義門ノ姚家ト号スル也。一旦(ひと)大小(たび)(大人と子供)死シ、尽キント欲(し)テ、独リ兄弟ノミ在リ、方ニ憂ヒニ居ス。而シテ弟ノ婦又卒シ、弟独リ小兒与(と)同室ニ処(を)ル。百許(り)ノ日度(す)ギテ、其ノ家人忽(には)ニ弟ノ室中、夜(よ)婦人(よ)与(と)語リ笑フガ若キ者アルヲ聞ク。兄、信ゼ弗(さ)ル也。因テ自ラ往キテ之ヲ聴キテ審(し)リ、一日其ノ弟ヲ励(た)シテ曰ク、吾ガ家驟(には)ニ衰フルト雖モ、且(た)世ニ義門ト号ス。吾ガ弟、縦(は)偶(つ)ヲ喪フトモ、寧(な)ゾ少(しば)ヲ待タズ、方(ま)ニ衰経(喪服の帯)モ未ダ除(と)カズシテ、外ヨリ婦人ヲ召シ、舎中ニ入レンヤ。吾ガ門ヲ辱メンコトヲ懼ル。將ニ奈何セントスト。弟因テ泣涕シテ言ク、然ラザル也。夜、与ニ言(た)ル所ノ者ハ乃シ亡婦爾(の)ト。兄瞳(目)見張る(諤)ニ直言(直言)シテ其ノ故ヲ詢(と)フ。則チ曰ク、婦喪セテノ踰(あ)クル月、即チ夜ニ門ヲ叩キテ曰ク、我、兒ノ乳無キヲ念ヒテ此ニ至ルト。因テ門ヲ開キ之ヲ納ルルニ、

果シテ亡婦ナリ。遂(す)ミテ徑(ちた)ニ榻ニ登リ、兎ヲ接取(だ)キテ之ニ乳ス。弟(れ)甚(おど)ク。是自リ數(しば)来リテ相ヒ与ニ語言スルニ、大抵平時ニ異ラズ。其ノ恠ニ懼キテ敢テ兎ヲ駭カサザリシ也ト。兄念フニ、家道ハ死ニ喪(うし)ヒテ殆(ほ)尽キ、今、手足(兄弟)独(だ)二人有リ。此レハ是レ吾ガ弟ヲ往(し)ニ亡サントスル爾(み)。且(た)弟ハ計(はかり)シテ絶(きり)ツルニ忍ビズ。然ラバ吾必ズ之ヲ殺サント。

因テ夜、大刀ヲ持チ門ノ左(りほと)ニ伏(おせ)ス。其ノ弟、知ラ弗ル也。果シテ門ヲ排(らひ)キテ入ル者ノ有リ。兄、力ヲ尽シ刀ヲ以テ之ヲ刺ス。其ノ人大ニ呼(け)ビテ去(にげ)ル。且(た)ニ之ヲ視レバ、則チ流血地ヲ塗(が)ス。兄弟因テ争ヒテ血ノ蹤ヲ尋ネ、墓所ニ至ル。則チ弟ノ婦ノ屍、墓外ニ横ハリ、傷キテ死セリ。

会(たま)其ノ婦ノ家、適(ゆ)キ至リテ此ヲ睹(まのあ)ニシ官ニ訟ヘテ墓ヲ開(あ)ケバ、則チ空棺耳(みの)。官治(ば)ク能ハズ。俄(ほど)ク兄弟咸(と)ニ獄中ニ死シテ、姚氏遂ニ絶ユ。

【参考】 説郛 卷四九 (二三四六)

〔41〕 伽婢子 一三—三「蛇瘡の中より出」

五朝小説の異疾志「刁俊朝妻」を河内の国の農婦の身

に翻する。切開したコブから飛出す動物を原話の「猿」(手なが猿)から蛇に代えたたのは、嫉妬を戒める一話に仕立てるためであろう。

★異疾志「刁俊朝妻」(存唐人百家小説・第一五冊⑥) 四ウ—五ウ)

安康ノ伶人刁俊朝、其ノ妻巴嫗、項(じやう)ニ瘰有リ。初メハ微(ちひ)キコト雞卵ノ若ク、漸ク巨キナルコト三四升ノ餅(水)ノ如ク、五年ヲ積リテ、大サ數斛ノ鼎ノ如クニシテ重ク、行(ゆ)ムコト能ハズ。其ノ中ニ琴瑟笙磬(つち)ノ響(おえ)キ細(かす)ニ有リテ、之ヲ聴クニ、音律ニ合ヒテ冷冷(清涼)ト楽シム可キガ若シ。數年ヲ積リテ瘰ノ外ニ小穴針ノ芒(き)ノ如キ者生ジテ幾億トイフヲ知ラズ。天ノ雨フラント欲スル毎ニ、則チ穴中ヨリ白烟ヲ吹クコト霏霏トシテ糸縷ノ如ク、將ニ高ク布散シ、結(まつ)リテ屯雲ヲ為シ、雨フレバ則チ立(たち)ニ降(くだ)ル。其ノ家ノ少(少年少者)長(年長者)之ヲ懼レ、咸(みな)遠ク巖穴ニ送(おく)テシテ請フ。俊朝忍ビズ。妻、之ヲ聞キ其ノ夫ニ謂ヒテ曰ク、吾ガ此ノ疾ハ誠ニ憎ム可ク、之ヲ送テナバ亦死シ、之ヲ拆(きり)カバ亦死セン。君、当ニ我が為ニ、之ヲ拆クコトヲ決シテ、何物ノ有ルカラ看ヨ

ト。俊朝即チ利刃ヲ磨淬シ、揮挑(ぎか)シテ將ニ妻ノ前ニ及
バントスルニ、癩ノ中ニ軒然(一ニ笑うさま)ト声有リ、遂
ニ四分シテ披裂シ、一ノ大猱跳躍シテ去ル有リ。即チ帛絮
ヲ以テ之ヲ裹メバ、癩疾頓ニ愈ユルト雖ドモ、冥然(一ニ暗
いさま)トシテ大漸(一ニ病が革まる)ス。

明ル日、黄冠(一ニ道士)有リテ門ヲ叩キテ曰ク、吾ハ乃
シ昨日ノ癩中走出ノ猱也。吾ハ本(とも)彌猴ノ精ニシテ、風
雨ヲ致(お)スコトヲ解(と)リ、無何(ひと)ニ漢江鬼愁潭ノ老
舸(とし)タル蛟(みづ)ト還往ス。嘗テ与ニ船阿(一ニ広記に「船
舸」ヲ覘(がう)ヒ、將ニ至ツテ他(れ)ヲ俾(し)テ之ヲ覆(く
が)サシメ、舟中ニ餼糧(いひ)ヲ求メ、以テ孫息ヲ養フ。昨
日太一(一ニ天帝)蛟ヲ誅シ、党与(一ニ徒党)ヲ搜索ス。故
ニ君ガ夫人ノ蟾蜍(一ニすくもむし)。美女の白く長い頸の
譬(な)ノ領(うな)ヲ借り、以テ性命ヲ匿ス。分チテ相ヒ于(か)
サズト雖モ、然(すな)累(あひ)ヲ為(な)スコト亦タ盛(お)シ。
今、鳳凰山ノ神処ニ、少シ許リノ靈病膏ヲ求メ得タリ。請
フ君、之ヲ塗レ、幸(ねが)ハクハ当ニ立(たちど)ニ愈エンコ
トヲト。俊朝其ノ言ノ如クニ之ヲ塗レバ、随手(たちど)ニ瘡
合(あ)ク。

俊朝因テ黄冠ヲ留メ、雞ヲ烹テ食ヲ設ク。食ヒ訖リテ酒
ヲ貰(か)ヒテ飲マント欲ス。黄冠因テ喉ヲ嚙(は)セテ高ク
歌フ。又糸匏瓊玉ノ音ヲ為(ら)ブレバ、鏘鏗(一ニ金玉の

音)ナラザルハ罔ク愛ス可シ。既(やが)辞去シテ詣(ゆ)ク所
ヲ知ル莫シ。時ニ大定中也。

【参考】太平広記 卷二二〇(二六六)

〔42〕 伽婢子 一三一四「伝戸禳去」

五朝小説の異疾志「徐明府」にほぼ沿つて翻案。原話
は、河南劉崇遠が癩瘵の病を救済してもらう話。伝染病
を扱つたため、防疫神信仰としての祇園社(八坂神社)を
舞台としたか。

★異疾志「徐明府」(存唐人百家小説・第一五冊⑥) 三ウ
(四オ)

金郷ノ徐明府ナル者ハ隱ニシテ道術有リ。河南ノ劉崇遠
ニ妹有リ。尼ト為リテ楚州ニ居ス。常ニ一ノ客尼有リテ寓
宿ス。忽(には)ニ癩ヲ病ミテ瘦ルコト甚シク且(ま)ニ死ナン
トス。其ノ妹之ヲ省(と)ル。衆(ひと)共ニ病者ノ身中ニ氣有
リテ飛蠱(一ニ広記に「飛虫」)ノ如ク其ノ妹ノ衣中ニ入ル
ヲ見ル。遂ニ見エズナリテ病者死ス。妹亦病ミ、俄(ほど)
クシテ劉氏院(き)ヲ拳(こ)リテ皆病ム。崇遠、明府ヲ求
ク(ねま)ク。徐ノ曰ク、金陵ノ絹一匹ヲ置ケ。吾、尔(ぢなん)ノ為
ニ之ヲ療(や)サント。言ノ如ク絹ヲ送り訖ヌ。翌日劉氏夢
ミラクハ、一道士ノ簡ヲ執リテ至リ、簡ヲ以テ偏ク其ノ身

ヲ撫ヅレバ身中ヨリ白氣上ニ騰ルコト炊(か)クガ如シト。既(て)寤(さ)ムレバ輕爽ニ遂(よ)ビ、能ク食ス。頃之(らく)アリテ、徐、絹ヲ封ジテ至リテ曰ク、絹ヲ席下ニ置キテ其ノ上ニ寢ヨ。即チ差(い)ユベシト。其ノ言ノ如クニシテ遂ニ愈ユ。已(て)其ノ絹ヲ視レバ、乃シ一ノ簡ヲ持ツ道士ヲ画キタリ。夢ミル所ノ如キ者ナリ。

【参考】太平広記 卷八五 (五三六)

〔43〕 伽婢子 一三一五「随転力量」

五朝小説の墨崑崙伝「李摩雲」を原話とするが、関連は人物造形の類似の程度を出ず、表現の一致する箇所も多くない。主人公随転の別名を明主座とするが、これは無門関二十三則「不思議善悪」に拠つたものごとくである。

★墨崑崙伝「李摩雲」(存唐人百家小説・第一九冊③) 二オ(二ウ)

李罕之ハ河陽ノ人也。少クシテ桑門ト為ル。無頼ニシテ至ル所ニ容レラレズ。曾テ滑州酸棗県ニ乞食セシニ、且(あ)自リ脯(ぐ)ニ及ブマデ、之ニ与フル者無シ。鉢ヲ地ニ擲(う)チ僧衣ヲ毀(お)リテ投(す)ツレバ、河陽ノ諸葛爽、

卒ト為ス。罕之素ヨリ多力、或ルトキ人(と)相ヒ毆チ、其ノ左頬ヲ毆テバ右頬ニ血流ル。爽、署(つか)ヲ尋(かん)ヘ小校ト為セバ、討賊ニ遣ス毎ニ、之ヲ擒ヘズトイフコト無シ。蒲絳ノ北ニ摩雲山有リ。堡(とり)ヲ上(だ)ニ設ケテ摩雲塞ト号シ、前後攻メ取ルコト能ハズ。罕之下シタリ。由テ此ヲ李摩雲ト号ス。歴官シテ侍中ニ至リ、後、唐自り梁マデ仕フ。

【参考】太平広記 卷二六四 (二〇六五)

〔44〕 伽婢子 一三一六「虱瘤」

五朝小説の異疾志「虱瘤」にはほ従うが、登場人物の医者名を変え、原話二話目の説話を同一話に取り込み改変。なお、同説話は、本草綱目四十一「人蝨」の項にも、典拠を「徐鉉稽神録」として掲載。

★異疾志「虱瘤」(存唐人百家小説・第一五冊⑥) 五ウ(六オ)

浮梁ノ李生、背ニ痒疾ヲ得ル。隱(おほ)ニ起(あ)リテ益ヲ覆(うつ)セタルガ如シ。痛ミ苦シム所無ク、唯奇(はな)痒クシテ忍ブ可カラズ。飲食日ニ削(へ)レドモ、能ク識(み)レル者無シ。医士ノ秦德丘之ヲ見テ曰ク、此レ虱瘤也。吾、

能ク之ヲ治サント。葉ヲ取りテ敷キ、其ノ上ニ又塗り、一ノ綿帯ヲ其ノ上ニ繞(めぐ)ラス。夕ヲ経テ瘤破レ、虱ヲ涌出スルコト斗許リ、皆蠢蠕(いづごめく)シテ能ク行動ス。即日体輕シ。但(た)一ノ小竅(あ)箸ノ端ノ如キアリテ合(と)ヂズ、時時虱ノ涌出ル有リテ計(か)フルニ勝(た)ヘズ。竟ニ死ス。嘗(こゝろ)ニ記ス、唐小説ニ載ス。賈魏公滑台ヲ鎮ル。日州ノ民此ヲ病ム。魏公ノ云ク、世間ニ藥療無シ。唯千年木ノ梳リテ燒キタル灰及ビ黃龍ノ浴水、乃シ治ス可シト。正ニ此与(と)同ジ。

★本草綱目四十「人蝨」

【釈名】虱(時珍曰)……【集解】(慎微曰)……。「時珍曰」……徐鉉稽神錄云、浮梁李生、背起如盆、惟痒不レ可忍。人皆不レ識、医士秦德立云、此蝨瘤也。以藥傅之。一夕瘤破、出蝨斗余、即日体輕。但小竅不レ合、時蝨出無数、竟死。予記唐小説載、滑台一人病之。賈魏公言、惟千年木梳燒灰、及黃龍浴水、乃能治之也。

〔45〕 伽婢子 一三一九「怪を話ば怪至」

五朝小説の龍城録「夜坐談鬼而怪至」を原話に、百物語という我が国独特の怪談会での出来事に翻する。百物

語はここに記される形式を守って百話に達すると怪異が出現するとされるが、「此物語百条に満ずして、筆をこゝにとゞむ」という措辞は、怪異小説の棹尾を飾るにふさわしい洒落た結びとすべきか。

★龍城録「夜坐談鬼而怪至」(存唐人百家小説・第一冊④
七ウゝ八オ)

君誨、嘗テ夜坐シテ、退之与(と)余(がし)ノ三人、鬼神變化ヲ談ズ。時ニ風フキ雪フリテ寒サ甚シク、牕ノ外二点点ト火明カニシテ流螢ノ若ク、須臾ニ千万点トナリテ数ヘ度(かは)ル可カラズ。頃(しほ)クシテ室中ニ入り、或ハ円鏡ヲ為シテ飛度リ、往来シテ乍(たち)チ離レ乍チ合ヒ、変ジテ大声ヲ為(た)テテ去ル。而シテ三人、退之剛直ナリト雖モ、亦タ之ガ為ニ動顔ス。君誨与(と)余ハ但(た)匍匐(はら)ヒテ目ヲ掩ヒ前席(二席からのり出す)スル而已(のみ)。信(まこ)ナルカナ俗諺ニ曰ク、白日二人ヲ談ズルコト無カレ。人ヲ談ズル則(き)ンバ害生ズ。昏夜ニ鬼ヲ談ズルコト無レ。鬼ヲ談ズル則ンバ怪至ルト。亦タ知言也。余ラ三人、後二皆利アラズ。

【参考】 說郭 卷二六 (二三四三六)

付表

一、『五朝小説』と『伽婢子』との関連を表にまとめてみた。
 一、『伽婢子』は巻数と話数の表示にとどめ、見出しを割愛した。
 一、『五朝小説』の「見出し・冒頭」のうちの「冒頭」とは、見出しを欠く話について、冒頭の数語で表示しようとするものである。
 一、「集」とは五朝四集に分ち、「存唐人百家小説」「存宋人百家小説」のように呼ばれるそれぞれを「唐」「宋」と略記したものである。
 一、「冊一作」は当該小説が「集」の第何冊に第何作として収まるかを示した。
 一、参考のために「太平公記」「説郭」の類話の所在を示した。ただし巻の表示にとどめ、活版本のページは【参考】に委ねて割愛した。

		伽婢子		五朝小説		太平広記		説郭	
	巻話	小説	見出し・冒頭	集	冊一作	丁付	巻	巻	巻
11									
10	四	諾臯記	元和中蘇湛云々	唐	五③	十七オ〜十七ウ	四七六	一一六	一一六
9	二	杜陽雜編	羅浮先生軒轅集云々	唐	三①	下六オ〜下七ウ	四八	四六	四六
8	六	杜陽雜編	武宗皇帝会昌元年云々	唐	三①	下二オ〜下三ウ 下一オ〜下二オ	四〇四	四六	四六
7		中朝故事	代説鄭畋云々	唐	二⑤	一オ〜二オ		一一〇	
6		集異志	漢末糜竺云々	唐	六②	九オ	一一六	三二七	三二七
5	五	博異志	岑文本	唐	六②	十二ウ〜十四オ	四〇五	一一六	一一六
4		靈鬼志	唐晁	唐	二四①	二十五ウ〜二十九ウ	三三二		
3	四	集異志 再生記	晉武帝咸寧二年十二月云々 顔畿	唐	六② 二三①	九ウ〜十オ 一オ〜一ウ	三八三	一一六	一一六
2	三	夢遊録	桜桃青衣	唐	五②	一オ〜三ウ	二八一	一一五	一一五
1	一	夢遊録	張生	唐	五②	十オ〜十一ウ	二八二	一一五	一一五

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	
一一				一一					一〇				九		八							七	
一	六	五	四	二	五	四	三	二	一	五	四	二	一	五	一	七	五	四	三	二	一	六	
龍城録	諾臯記	集異記	鉄困山叢談	鉄困山叢談	諾臯記	劔侠传	才鬼記	諾臯記	諾臯記	談淵	諾臯記	博異志	靈鬼志	諾臯記	諾臯記	博異志	靈鬼志	靈鬼志	劔侠传	靈鬼志	靈鬼志	集異志	
趙師雄醉憩梅花下	和州劉録事者云々	裴珙	劉器之安世元祐臣云々	金蚕毒始蜀中云々	工部員外張周封言今年云々	田膨郎	魯季衡	臨清有妬婦津云々	太和末荆南云々	太原王仁裕家祖母云々	許卑山人云々	陰隱客	崔書生	元和初有一士人云々	大足初有士人云々	馬侍中	柳參軍	王玄之	崑崙奴	蘇韶	勝兒	北齊爾朱世隆云々	
唐	唐	唐	宋	宋	唐	唐	唐	唐	唐	宋	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	
一④	五③	五④	五④	五④	五③	九③	二三⑤	五③	五③	五⑤	五③	六①	二四①	五③	五③	六①	二四①	二四①	九③	二四①	二四①	六②	
四才〜四ウ	十七ウ〜十八才	四ウ〜六才	八才〜八ウ	十六才〜十六ウ	二十九ウ〜三十才	十六才〜十八才	二十八ウ〜三十ウ	八ウ〜九才	二十六才〜二十七才	三ウ〜四才	二十ウ	十才〜十二ウ	十三才〜十五才	十四ウ〜十五才	九ウ〜十一才	十七才〜十八ウ	十才〜十二ウ	六才〜七ウ	十八才〜二十一才	二十三ウ〜二十五ウ	十九ウ〜二十一才	十一才	
	一一二〇	三五八				一九六	三四七	二七二	四七六		二二〇	二〇	三三九		四六九	三五六	三四二	三三四	一九四	三一九	二八〇	一四二	
二六	一一六	一一五	四九	四九	一一六	一一二		一一六	一一六	三五	一一六	一一〇		一一六	一一六	一一六			一一二			一一六	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35
						一三				
九	六	五	四	三	二	一	六	五	四	三
龍城録	異疾志	墨崑崙傳	異疾志	異疾志	鉄冨山叢談	諾臯記	集異志	茅亭客話	睽車志	睽車志
夜坐談鬼而怪至	虱癩	李摩雲	徐明府	刁俊朝妻	河中有姚氏云々	博士丘濡説云々	後趙石季龍時云々	庚子歲天兵討益部賊云々	龍舒人劉觀云々	紹興初福建寇乱賊云々
唐	唐	唐	唐	唐	宋	唐	唐	宋	宋	宋
一④	一五⑥	一九③	一五⑥	一五⑥	五④	五③	六②	二③	一七③	一七③
七ウゝ八オ	五ウゝ六オ	二オゝ二ウ	三ウゝ四オ	四ウゝ五ウ	五オゝ六オ	十三オゝ十四ウ	七ウ	二ウゝ三ウ	一オゝ二オ	三ウゝ四オ
		二六四	八五	二二〇		三五七				
二六					四九	一一六	一一六	三七	一一八	一一八